

「教育行政」を問い直す

荒井 英治郎 (信州大学学術研究院総合人間科学系)

1. はじめに

本稿は、2020年度に開講した教職科目(選択)「現代社会と教育問題」(2020年12月8日)の授業にオンラインゲストとしてご参加いただいたゲストティーチャー(竹内延彦氏:池田町教育委員会教育長)の講演内容を再構成したものである。記録作成に当たっては、本学の学生である金子孝也さんに尽力いただいた。記して感謝を申し上げたい。

2. ゲストティーチャーの話

(1) 自己紹介

【ゲスト】池田町教育長の竹内延彦と申します。今日はこのような機会をいただきありがとうございます。今日私がお話するのは、私自身のこれまで30年ぐらいの人生を振り返るようなものです。これからの教育行政のあるべき姿を私なりにお伝えできたらと思います。

今日は「教育行政を問い直す」というテーマをいただいています。池田町は2020年の1月1日から第2次教育大綱をスタートしました。その基本理念は、「子どもがまんなか 未来を拓く ひとづくり」です。「子どもがまんなか」という言葉を何より大切にしています。

私は大学で臨床心理学を専攻し、その後不登校や様々な障害を持った子どもたちが

通う都内のフリースクールに関わりました。そこでの経験が今の自分の原点になります。そして企業やNPO等での経験を経て、2011年から長野県庁の職員となり、子ども若者支援全般に取り組みましたが、不登校、ニート、引きこもり等の子ども若者の支援のみならず、自然保育という、幼児期の子ども達の豊かな自然体験、生活体験を保障するための環境づくりの普及にも携わりました。

(2) 「学校」を問い続けた30年間

【ゲスト】教育長である私の原点は24歳で出会ったフリースクールですが、それ以前の私は学校に行かないことを否定的に捉えていました。そして学校に行かない子どもにはその子自身に問題があるのではないか

と当たり前のように考えていました。フリースクールに行った当初の目的は修士論文のためでしたが、そのタイトルには「学校不適児」という言葉を何の違和感もなく使っていました。ところが、フリースクール初日に「学校不適応という考え方自体が間違っている。子どもが学校に合わせるのではない。学校が子どもに合わせるべきなのだ。」と言われ、衝撃的なカルチャーショックを受けたことは忘れもしません。そこで出会った子どもや保護者の方との関わりの中で、私は自分の価値観を180度転換することができました。そんな原点に出会えたことによって、その後30年間にわたって日本の学校教育制度の外側で色々な活動することになったわけですが、全国にはフリースクール、フリースペース、オルタナティブスクールといった日本の学校教育法に位置づけられていない子どもたちの学びや生活の場が多く存在していることを知りました。私は、フリースクールの本質は「子どもがまんなか」であり、「多様性の尊重」、「自己決定の原則」、「安心、自信、自由」、「命や暮らしの学び」であると感じ、それらを求めている人たちが学校の外側で学んだり育ったりしているということを知りました。そういった学びの場がこの30年間で全国各地に増えています。

私は学校に違和感を抱く子どもたちは、日本社会の現状に対する危機感を身をもって我々に教えてくれる存在ではないかと思っています。それは逆に言えば、彼らの声に耳を傾けることによって、これから日本の教育や学校がどうあるべきか、どういう方向に進んでいくべきか、ということへの気づきにつながると感じています。

(3) 「一斉休校」から見たもの

【ゲスト】新型コロナウイルスによって2020年3月2日から全国一斉休校（休業）が行われました。首相が2月27日の夕方に要請を出し、それを受けて3月2日から全国9割以上の学校が休校に入りました。

長野県でも3月2日から全県の約65%の学校が休校となりましたが、池田町の小中学校は2日遅らせて3月4日から休校に入りました。遅らせた理由は、行政だけで決断せずに小中学校の校長先生と話し合い、学校現場の思いや状況を尊重したからです。私はまずは現場の声を聞きたいと思ったので、要請が出された翌日の2月28日の朝一番で校長先生方に集まっていただきました。現場は休校要請について率直にどう思いますかとお聞きすると、先生方は2日からの休校は無理だし、子ども達のためにしたくないとはっきりおっしゃいました。そして最低でも2日間の準備が必要だとの考えを示してくれました。

私が休校を遅らせた理由は、3つあります。まず1つ目は「子どもに少しでも気持ちの準備をさせてあげたい」ということでした。いきなり今日で今年度の学校は終わりだと言われる子どもの気持ちを想像した時に、あまりにも酷だと思いました。特に小学6年生と中学校3年生が卒業式まで誰とも会えない状況になることを考えたときに、新型コロナウイルスの感染予防は大前提ですが、それ以上に子どもの気持ちを優先したのです。

2つ目は、先生にとっても2日からの休校は土日に出勤して準備をしなくてはならないので負担が大きいと思いました。

そして3つ目は、保護者にとっても、休校に入ったら子どもが家にいることになるため仕事の調整をしなくてはいけなくなり、それを全て28日中に準備することは難しいだろうと考えました。

池田町は現場の声を受け止めて3月4日から休校にしましたが、その判断が正解だと言っているわけではありません。市町村が責任を持つ小中学校の休校は、本来は自治体が決めることができるのに、国の要請に対して結果として従わざるを得ないと諦めた自治体が多かったのではないかと感じており、それが果たして地方自治体の判断や行動としてよかったのだろうか疑問に思っています。

3月4日からの休校のために設けた2日間の猶予は非常に大事だったと、今でも思っています。そう判断できたことで教育委員会と学校現場との信頼関係が壊れなかったからです。行政が現場の意見を尊重すれば、先生方も子どもや保護者に配慮する気持ちの余裕が持てますし、その後のコロナ対応や休校が明けて学校を再開した6月以降の教育委員会と学校現場、学校と子どもや保護者とのコミュニケーションはとてもしやすくなったと感じています。

(4) 子どもの力を信じる自然保育

【ゲスト】ここで皆さんに動画を見ていただきます。この動画は私が県庁で自然保育の普及事業を担当していた時に作った紹介ビデオです。先程子どもがまんなかについて話しましたが、子どもが自ら育つ、自ら学ぶ力を持っていることを信じて、その力を発揮できるための環境を作っていくことが

すごく大事だと思います。

ビデオに登場する森のようちえんくじら雲代表の依田敬子さんは、「自然保育が目指す姿として、遊び込む、遊び切るということを意識しています。その中で子ども達は自ら生きる力を育み、自分らしさを大切にしています。」とおっしゃいました。子どもだけでなく大人になっても、自分らしく生きることは自律的な生き方として注目されていますが、その根っこが幼児期にあるのです。

保育者は子どもたちのやりたいことを実現するために存在しますが、これは学校の先生方も基本的に同じだと私は思っています。先生方は児童生徒が学ぶべきことを教えるというよりは、子ども自身が学びたいと思うことを実現できる環境を作っていくことがこれから一層求められると思っています。

子どもにとって自分の気持ちを本気で受け止めてもらった経験は、特に幼児期には大切であることも伺いました。ここで自然保育のエピソードを2つ紹介したいと思います。

1つは手袋を燃やしてしまった男の子の話です。冬のある日の森のようちえんでは、子どもたちが雪遊びをすると手袋も服も濡れるので、焚火の周りに濡れた手袋を置いて乾かします。その日に見学をしていた方が、ひとつの手袋がこげて煙を出しているのに気付きました。でも見ている周りの先生方は何も言いません。後で園長先生に聞くと、こげた手袋の持ち主の男の子は、前は手袋を火にもっと近づけてしまい全部燃やしてしまったそうです。その時も先生方は何も言わなかったそうですが、その子は

自分の失敗から自ら学び、今回もこげてはしまいましたが、大人が指示しなくても自分で考えて一回目よりも焚き火から離して置いたのです。

その話を聞いた時に、私は幼児でもちゃんと自分の失敗から学ぶことができることを知りましたし、むしろ幼児期にこそ、小さな失敗体験を重ねることが非常に大事だと感じたのです。

ある中学校の校長先生から「学校はトラブルを学ぶ場である」ということをお聞きしたこともあります。大人が全部お膳立てするのではなく、子どもが自ら色々経験しながら育っていくことが大事だと思います。

もう一つのエピソードは、小川を飛び越える5歳の男の子のお話です。その小川は自然の小川で川幅が同じではありませんでした。その男の子は小川の一番川幅が広いところを飛び越えたいと思っていたのですが、いきなりそこをチャレンジするのは怖いので、幅が一番狭いところから飛び始めました。そして徐々に川幅が広い場所に移動しながら何度も何度も繰り返し飛び越える経験を重ねた後に、最初に飛ぼうとしていた一番広い川幅を、自信を持って飛び越えたというお話です。

私がこのお話から感じたのは、子どもが自ら課題を設定し乗り越えることで、実感できる達成感や自信がより大きいのではないかとことです。幼児でも自分で課題を設定することができ、それをクリアするためにどうすればいいのかと自分で考えてスモールステップを踏んで、自信を蓄えながら最終ゴールに到達できたわけです。

小学校に上がると、途端に30人全員に同じ教科書と授業のやり方で一人の先生が教

えることとなります。30人の子どもたちは当然一人ひとり発達段階や興味関心が違います。これからは子ども一人ひとりに合わせる個別最適化を図り、子どもが自ら課題を設定できるということが本当に大事だと思っています。

(5) 教育から子ども主体の遊育へ

【ゲスト】続いては、天野秀昭さんというプレリーダーの先駆者のお話を紹介します。プレーパークでは教育という言葉を使わずに「遊育」という言葉を使うそうです。遊びで育つことで自分を出すことができ、主体性や自己肯定感が高まります。従来の教育という言葉は主体が子ども以外になりやすく、子どもが受け身になってしまいます。天野さんがいる世田谷区羽根木プレーパークに来ている子どもたちは、学校でも家庭でも仮面をつけているが、プレーパークでは全部外せるんだと、天野さんに話したそうです。天野さんは仮面をつけた子どもは自分の心を殺しているのではないかと感じるそうです。ある小学校4年生の女の子は、「プレーパークに来て初めて自分は生きている気がした。自分は生きていたけど生きていなかった気がする」と言ったそうです。

(6) 「遊園地型」の教育から「原っぱ型」の教育へ

【ゲスト】著名な哲学者の鷺田清一さんが従来の学校教育は「遊園地型」であり、これからは「原っぱ型」の教育へ転換すべきというお話をされました。これからの時代では、予測不能なことが起きた時にどのように社

会を存続させるか、知恵と技をいかに工夫して使うかが問われています。これまでの教育は、教える側がジェットコースターやメリーゴーランドといったような多くのメニューを用意し子どもが選択するだけのいわば「遊園地型」の教育でした。しかしこれからの教育は、何もない原っぱで自ら遊びのルールを作り、その空間に意味を与えるような「原っぱ型」の教育がとても大事だということです。これは幼児期における自然保育そのものであり、そのまま学校教育にも繋がると思わせてくれるお話だと感じています。

人間が何に幸せを感じるかという調査があります。人間は学歴でもなくお金でもなく、自己決定できた時に幸せを感じるそうです。これは子どもも大人も同じだと思います。学校においても家においても会社においても社会においても、自分の意思で判断し、自分の考えで決定できる環境が保障されることが重要だと思います。

自然保育では自己肯定感を特に大事にしていますが、自己肯定感とは「何かができるようになった」から高まるというよりは、「ありのままの自分を受け止めてもらっている」という安心感によって得られるのではないかと感じています。子どもの発達の差を比較するのではなく、子どもの多様性を個性の違いと捉えることによって、ほとんどの子どもの自己肯定感を下げないことができます。自己肯定感を子どもの側から言い換えるならば、「自分をあきらめない」ということだと思っています。

岐阜県立森林文化アカデミー准教授の萩原・ナバ・祐作さんは、「子どもは一つ一つ違うタネである」とおっしゃいました。違う

タネからは同じ野菜はできません。同じように子どもも1つ1つ違うタネなのだから、同じような大人にしたいと考えても無理なのです。ゆえに子ども同士を比較することは無意味なことなのです。

「Most Likely To Succeed」というドキュメンタリー映画をご覧になった方は多いと思います。この映画では、今の時代よりスピーディーに変化していくこれからの時代においては子どもたちに持って欲しい能力は「非認知的能力」(ソフトスキル)であると言っています。また、植物は適切な環境さえあれば自然に成長するものであり、それと同じように人間も相応しい環境があれば、どの子も健全に育ち自分の力を発揮できるとし、教育は「ガーデニング」と同じだと言っています。

(7) 育成すべき資質・能力の3つの柱

【ゲスト】2020年に新学習指導要領が始まり、その中で「確かな学力」、「健やかな体」、「豊かな心」のトライアングルが大事だと言われています。「知識技能」、「学びに向かう力」、「思考力・判断力・表現力」の3つがバランスよく育まれることが重要です。

(8) 子どもは一枚の風呂敷

【ゲスト】文部科学省の長田徹さんは、「子どもは一枚の風呂敷と同じ」という話をされました。子どもを一面的に捉えるのではなく、一人の人間として全体的に捉えることが大事です。当たり前のことですが一枚の風呂敷はどこをつまんでもふろしき自体が持ち上がります。風呂敷を子どもに例え

ると、その子のどのような要素でも、その子の興味関心のあることや、得意なこと(勉強以外でもOK)を伸ばすことで、結果として学力を含むその子の全体の能力が向上するのです。つまり子どものやる気スイッチは一つではないのです。その子の得意なことを伸ばしてあげれば、結果として、学びに向かう力や意欲につながっていくと思っています。

(9) 保小中混在の風越学園の挑戦

【ゲスト】2020年4月に開校した軽井沢風越学園の理事長本城慎之介さんは「自分で切り株を選び、挑戦する。諦めることを自分で決め、次の挑戦の場を選ぶ。そして一人で満足する。こういう子どもの姿に出会った時、“過不足なくかかわる”ということの難しさと大切さを感じる」ということをおっしゃいました。大人は関わりすぎても足りなくてもいけないということであり、あくまでも主体が子どもにあることを認識して、それを踏み外さないで大人が過不足なく関わるのが大切です。

また同学園の校長園長先生である岩瀬直樹さんは「これからの社会を創っていく子どもたちにとって、教室での経験は『20年後の社会』のありようにつながっている。主体的に学校や自身の学びをつくる経験は、主体的に社会に参画しようというマインドを育て、『言われた通りにする』経験を積み重ねれば、受動的で消費的なマインドを育てるだろう。自分の人生をデザインしつっていく主体性・創造力は前者でしか育たない」ということをおっしゃいました。大事なものは、自分の人生をデザインし作ってい

くための主体性や創造力を育むということだと思います。

(10) 池田町が目指す「子どもがまんなか」の学び

【ゲスト】池田町の第2次教育大綱の基本理念は「子どもがまんなか 未来を拓くひとづくり」ですが、それに基づく基本目標が3つあります。

1つ目は、「信州池田町学びの郷『保小中15年プラン』の推進」で、これは0歳から15歳までの切れ目なく育ち学ぶ環境を作っていきたいというものです。

2つ目は「池田町全体で『学び合い・育ち合い・支え合う』地域づくり」で、町全体が学びのフィールドであるという意識を持つということなのです。

そして、3つ目が「生涯にわたる学びと健康な人生を楽しめる環境づくり」です。

大綱には子どもが生まれてから最低15年間は責任を持ちましょうという覚悟が表されていますし、一人ひとりの多様性を尊重し特性への合理的配慮を学校現場でも意識することが掲げられています。また自己肯定感やコミュニケーション力といったソフトスキルの向上、そして、人生の根っこである幼児期を大切に考えています。

私たちは、15年かけて一人ひとりの子どもが意欲を貯め続けるというプラスの循環を作ってきたと願っています。成功体験と失敗体験を通じて自己決定の経験を重ね、達成感や幸せな気持ち、安心感、自己肯定感を得て、自信を持ちまた挑戦していくというこの循環が、保育園でも小学校でも中学校でも繰り返し行われるようにしていきたい

いです。

改めて、「子どもがまんなか」とは、子ども本位の学校教育を追求し続けることです。子どもは、幼児期から自ら育ち、学び、自分の未来を自ら拓きます。それを全ての大人が共有し信じていきましょう。

(11) 教育行政はどうあるべきか

【ゲスト】人々の価値観や生活スタイルは実に多様化していきます。自然保育やオルタナティブ教育もどんどん広がっています。公立学校も多様化しています。そういう流れの中においては、教育行政はこれまでのような管理・監督・指導という立場から、主体的な学習者（子ども、教師、保護者）を支援するプラットフォームに役割を転換すべきだと思っています。教育行政に携わっている者の責任として、教育行政も自ら変革すべきだということを他の自治体に強く呼びかけてきたいと思っています。学びの当事者が望む子育てや保育・教育を実現するための環境づくりにおいて、誰のための学びなのか、誰のための学校なのかということを確認し、学びの当事者がそのための環境づくりと一緒に取り組める支援をしていきたいと思っています。

目指すべき方向は、「一人ひとりが幸せに生きる」ということです。幼児教育や学校教育は、幸せな人生を自らが自ら実現するためにあるのです。

教育の当事者性を高めることが大切ですが、これからの時代はコミュニティ・スクールのように保護者や地域住民の学校運営への具体的な参画が重要です。形だけではなく中身も伴ったコミュニティ・スクールが

各自治体で広まってほしいです。行政は保護者や地域住民が声を上げやすい環境を作ることが大事だと思っています。つまり「お上による学校教育」を保護者、教師、地域に返すことが重要なのです。当事者性の喚起が保護者、教師、地域住民による「学校を創る自由」につながると考えているので、子ども、保護者、教師、地域住民に当事者としての意識づけを呼びかけながら学校を創る自由を発信していきたいです。また中央集権から地方分権化を私はもっと強力に進めるべきだと思っています。地域性を大切にできる学校教育の実現が子どもの生きる力を育み、地域の未来を拓くからです。学校は民主主義を学ぶ場です。学びの自由や学校運営の参画の自由が保障されていなければ、やはり民主主義自体を学べないと思います。海外に行けば民主主義が文化として浸透していますよね。海外では小さい時から民主主義を、わかりやすい言葉で子ども達に伝えている姿を見ることができますが、日本では弱いと思っています。

“If we teach today’s students as we taught yesterday’s, we rob them of tomorrow.”（もし私たちが生徒に昨日と同じように今日も教えるならば、私たちは子どもたちの未来を奪っているのです）という言葉は、「Most Likely To Succeed」の最後に流れるメッセージです。公教育は決して立ち止まらず、常に前向きに変化していかなければなりません。

(12) 質疑応答

【学生】現在、教師にはどのようなことが問われていると思いますか。

【ゲスト】先生もそれぞれの個性があるので一律にこうあるべきと考えるほうがよいと思います。まずは子どものありのままの姿を受け入れようという気持ちが大切です。また「教えたがる人」は教師にしてはいけないと考えています。

【学生】お話の中で自己肯定感を高めることの重要性があったと思いますが、現代の学校教育ではまだまだ少数派が排除・敬遠されがちと感じます。教職を志す学生はどのようなフォローまたは改革が必要だと考えていますか。

【ゲスト】子どもの自己肯定感を高めたいならば、自分の自己肯定感を大切に考えたらいよいと思います。子どもの自己肯定感を高めるといよりも大人としての自分が自分らしく生きているかを考えるべきです。

【学生】教員には人事異動も多いと思います。池田町の教育をどう理解してもらい、周囲に広げていきますか。

【ゲスト】まずは池田町に住み続ける地域住民や保護者などが自分事として参加できる環境を作ることができれば、異動してくる先生たちへの意識の共有もしやすくなると思います。そして池田町全体が学びの場という認識を作っていきたいです。

【学生】これまでの環境の中で自主性を見い出せていない子どもは、また居場所を失ってしまうのではないのでしょうか。

【ゲスト】現状において子どもは自由を実

感していないのではないのでしょうか。時間がかかると思いますが、自由、自己決定を丁寧に繰り返し教えていくことが大切です。まずは子どもを信じて待つこと、そして自分で判断し決定する小さな経験を積み重ねることで、どの子どもも自主性が育まれると思います。

【学生】今日の日本では待機児童と保育士の不足の問題がありますが、池田町の現状はどうでしょうか。

【ゲスト】待機児童はあるともないとも言えます。もともとの枠が少ないため希望があっても受け入れられないときがあります。3歳以上は希望を受け入れています。なお、幼児施設においても選択肢はあった方がよいと考えています。

【学生】池田町の教育目標・理念をどのように発信しているのでしょうか。

【ゲスト】町民や保護者との懇談会や SNS 等を通じて発信しています。保護者が自主的に学習会なども開催しており、そうした機運を地域全体で醸成し、立場を越えて池田町全体で共有することが大切です。

【学生】学校や先生の主体性について、どのようにお考えですか。

【ゲスト】新型コロナ禍においては学校運営全てが不測の事態でした。ピンチをチャンスに変えようという意識を共有し、その結果、前向きな雰囲気作りが成功につながりました。教師間の連携、保護者との連携を

大切に考える方が不可欠です。

【学生】大多数が偏差値に縛られているのが現状だと思います。評価をするということを含め行政としてはどうなっていくことを考えていますか。

【ゲスト】簡単には変えられないし、変えたくないという思いもあるでしょうが、子ども同士を点数のような一面で比較しない評価づくりを目指すべきです。学校に対しても教育委員会などの行政が評価をするのではなく、子ども、保護者など当事者による評価の仕組み作りをさらに充実させた方がよいと思います。

これから学校の現場に立つ皆さんは、基本的な理論などは学んだ方がよいと思いますが、それに縛られずにその場その場で目の前にいる子どもや保護者、同僚たちから色々なことを感じ、学びながらキャリアを積んで頂きたいと思います。併せて、教育という狭い世界だけでなく、社会の様々な分野で生きている人たちがいますので、そうした学校外の人たちと積極的に交流することを大切にしてください。